

European League Against Rheumatism (EULAR) Congress 2015 and 2015 American College of Rheumatology/Association of Rheumatology Health Professionals (ACR/ARHP) Annual Meeting



小倉 剛久

東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野 (大橋)

リウマチ膠原病領域における2大国際学会である European League Against Rheumatism (EULAR) Congress 2015 と 2015 American College of Rheumatology/Association of Rheumatology Health Professionals (ACR/ARHP) Annual Meeting に東邦大学医学部内科学講座膠原病学分野 (大橋) (当教室) から亀田秀人教授, 平田絢子医師, 筆者の3名で参加させていただいたので報告する。

EULAR Congress 2015

EULAR Congress 2015 は2015年6月10~13日, 真夏の日差しが照りつけるイタリア, ローマで開催された。出発時に羽田空港で預けた荷物が, ローマの空港で迷子になっていたようで, 筆者よりも4日遅れて滞在していたホテルに届くというアクシデントに見舞われつつも無事現地に到着した。

まず今回の大きな目的の1つである本会議に先立って6月7~10日に行われた22nd EULAR Sonography Course に参加した。これはEULARが主催する超音波検査技術を学ぶ講習会で初級・中級・上級と3段階に分かれており, 毎年EULAR本会議前に中・上級コースが開催されている。リウマチ性疾患に行われる画像診断として超音波検査は日本でも近年脚光を浴びているが, ヨーロッパではより古くから取り組まれていて, トレーニングシステムも確立されている。世界各国から参加者がおり, 近年では日本人の参加者も増加したと聞いていたが, エントリー方法が変わった影響なのか今回は日本からの参加は筆者1人であった。Sonography Courseの会場は市街から少し離れたところにあるホテルで, 周辺は住宅街のような場所にあり3泊



ローマ
街中からコロッセオを望む。

4日の間, 超音波検査とじっくり向き合う日々となった。講義だけでなく実際の患者さんにも多数ご協力いただき, 多くの時間, 少人数のグループで実技指導を受けることができた。日本でも実技を交えた超音波検査の講習会はあるが, EULAR Sonography Courseの内容はさらに濃く, 今後の診療・研究につながる有意義な講習会だった。

その後の本会議では, 当教室の平田医師が, 関節リウマチ患者における自覚症状, 診察所見と超音波検査による滑膜炎との関連を比較検討するという内容でのポスター発表を, 共同演者として見守った。また同じ会場で, Sonography Courseの実技でグループが同じだったイタリア人が血管炎における positron emission tomography (PET) 検査の



サンフランシスコ
海からの街並み。

活用を報告しており、お互いの国における PET 事情の相違などを知ることができ、興味深いものがあった。

2015 ACR/ARHP

ACR は 2015 年 11 月 6～11 日、暖かさのまだ残るアメリカ、サンフランシスコで行われた。東京の 11 月という冬気配を感じる時期なのだが、期間中天候にも恵まれ、ジャケットがあれば十分暖かく過ごせる状況だった。2014 年 11 月に ACR の行われたボストンではコートの手放せない寒

さだったことを考えると、今回は非常に快適であった。また会場は街の中心地からほど近く、有名なケーブルカーの発着場からも徒歩で行ける便利な場所にあった。

学会では「Relationship between finger joint cartilage evaluated by ultrasound and clinical characteristics in rheumatoid arthritis」という演題で超音波検査によって関節リウマチ患者における手指軟骨を評価検討するといった内容をポスターで発表した。

関節リウマチはここ約 10 年で大きく治療の進歩した疾患のひとつであり、かつて対症療法しか行うことができず、黙って関節破壊の進行を診るしかなかった時代から、関節破壊の起こる前に生物学的製剤やその他の抗リウマチ薬を用いて寛解を目指すことができる時代になってきた。学会の演題も生物学的製剤に関する研究が多くみられたが、診断・治療を助けるツールとして高感度な画像診断の重要性は増しており、当教室でも取り組んでいる超音波検査をはじめとした各種画像検査に関する演題も多くみられた。日本ではなかなか見られないような切り口の研究もあり、新たな刺激となった。

最後にご指導いただいた亀田秀人教授はじめ、年 2 回の海外学会参加の機会を与えていただいた当教室員一同に感謝しつつ、今回の貴重な経験を生かし、臨床と研究に邁進したいと考えている。

DOI : 10.14994/tohoigaku.2016.r039